
光と闇

ミーさん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇

【Nコード】

N6895X

【作者名】

ミーさん

【あらすじ】

あの闘いから17ヶ月過ぎた。死神の力は皆のお陰で取り戻し家族や友人達を失わずに済んだ。だが…

虚（前書き）

初です。

グダグダですが、宜しく願います。

虚

月の光を浴びながら屋根を駆け抜ける一人の青年がいた。
上下黒い着物に身を包み、背中に見えるのは大きなサラシの用な物
に巻かれた大刀…一番目立つのが風に靡くオレンジ色の髪。

駆け抜ける先には仮面をつけた虚と呼ばれる化け物が一匹。

「地域担当は何やってんだ」

青年は、そんな化物に追い付き背中にある無骨な大刀を手に取り
布が巻いてあった晒しがサラサラと解かれる…と同時に虚目掛け一
気に降り下ろす。

「グオオオオオー」

虚は断末魔の叫びとともに塵の用に消えていく。

「ふう…イツチヨあがり」

月の光に照された人物こそ死神・黒崎一護であり将来隊長と噂され
ている人物である。

日常（前書き）

続きます。

日常

「グッモーニーンー護！！」

と、ドアから勢い良く飛び蹴りを繰り出して来たのは一護の父・黒崎一心である。普段お茶ら毛て見えるが家族の事を第一に考える（娘達限定？）良き父親でありそして死神でもある。一護は、その飛び蹴りを交わすと手を顔面に充て床に叩き落とす。

「朝っぱらから毎度毎度何考えてやがる！！このクソ親父！！」

「何を言う！父さんのスペシャルファイティングドロップキック（長い！）を何故避ける？！」

「うるせー朝っぱらから近所迷惑何だよ！！少しは大人しくしやがれ！！このクソ親父！！」

ボキバキボキ！

「ギャー！！！！」

と、言う悲鳴が朝から木霊した。

「お兄ちゃん！ご飯出来たよー！」

と、下から遊子の声

「おう、今行く!」

「あれ?お父さんは?」

「上で伸びてるんでしょどうせ直ぐ復活するって掘つときの遊子」

「ふうーん。そ」

何とも素っ気ない娘達である。だが、娘達の聴こえたのか?

「遊子夏梨どうして父さんにそんなに冷たいんだ?父さん悲しい!」

「ほら復活した」

「母さん娘達が思春期なのか娘達が構ってくれないよ」

と、言いながら真咲遺影特大ポスターに向かって泣き真似をする一心。

其をよそに、

「さ、ご飯食べよ。」

「」「頂きます。」「」

「!?!母さーん!娘達が冷たいよ」

「一生やつてろ！！このバカ親父！！！」

「ね〜！速くご飯食べちゃってよ！片付かないでしょ！」

「・・・はい・・・。」

食事を終え

「行つてきます。」

「そんじゃ、俺も行ってくるぜ」

遊子も夏梨も霊力が有り遊子はウッスラしか見えてなかった霊ははつきり見える用になり、また夏梨は霊的濃度が更に磨きがかかった。空座町は、そんな霊的濃度の高い人が多いため死神が重点的に見廻りをしてきている。

睡魔（前書き）

携帯だとちょっと厳しいね。

睡魔

「夏梨ちゃん…起きて…ねえ、起きてってば…」

遊子が揺り起こす。

「うう…ん…誰？」

寝惚けていた為かいきなり遊子の腕をおもいつきり掴んだ！

「痛いよ！夏梨ちゃん！」

少しの間ぼんやりしていたが、臆て覚醒し…

「あれ？」

「もうお昼だよ！夏梨ちゃん。翠子ちゃんと一緒に食べよ！早くしないと時間が無くなっちゃうよ！」

「うん、分かった」

そう言いながら翠子と三人で食べ始めた。

ふと遊子と夏梨は何げなく窓の外を見た。

「ねえ？二人してどうしたの？」

翠子は二人が同じ方向を向いて惚けーとしていたので聞いた。

「「え？」」

「だつてさあゝ二人して窓の外なんか見ちゃつて…何か見えるの？
……まさか！！また幽霊！？」

「「…うん」」

「やっぱりね。だと思つた。最近、二人して同じ方向見たり、それに双子だからかな？夏梨は、前から幽霊さんはつきり見えてるのは分かつてるけど…遊子つてそれほどでも無かつたでしょ！

「あと、授業中先生には分からない用に居眠りしてるよね。先生の目は誤魔化しても私の目は誤魔化せないよ！二人ともホントゝに大丈夫？」

普段、遊子も夏梨も授業中滅たに寝ることはない。だが、此处最近眠くて眠くてしょうが無いのだ。

「「……………」」

二人して何も言えずに、遊子と夏梨は、顔を見合せた。

その頃、虚を発見した。

エリート死神？アフロさん？いやいや多分芋山さんだ！！

「えーい！このエリート死神！車谷源之助を嘗めるなー！！」

「それと名前を間違えるんじゃないぞ！チキショー！」

と、虚を倒していた。

存存（前書き）

最近？コンの姿が見えないような？

存存

「ねえ夏梨ちゃん…私たち最近変だよな。授業中に居眠りしちゃったり朝早く起きれなかったり…って聞いている？夏梨ちゃん！」

「?…うん。」

夏梨と遊子は、下校途中歩きながら話していた。だけど何処か夏梨は上の空…

「此の儘続いたら授業に付いていけなくなっちゃうよ！」

遊子と夏梨は困っていた。それは、本当に遊子が言った事は、間違いでは無いし、自分も勉強に付いていけなくなるのは嫌だ。それに夢の事も気になる。

まあ、夢と言っても全て覚えて居る訳でわない。

二人は、何故かは分からないが最後は誰かの手が目の前に差し出され、その手を掴もうとした所で目が覚めるのである。

「「ただいまー」」

「おう、おかえり。」

今日は、カレーだからね。

と、言いながら着替えをしに二階に…

廳で着替えを済ませた遊子は、エプロンを掛ながら台所へ

夏梨も着替えを済ませリビングに行こうとしたが、隣から物音がした。

「あれ？一兄帰って来たかな？」

夏梨は、15と書かれてあるプレートの前まで行き、

「一兄居るの？…開けるよ。」

と、言つて部屋に入った。

「一兄？」

夏梨は、辺りを見渡した…部屋の片隅で必死に人形の振りをしていたが…夏梨の目がコンの人形を捕えた。夏梨は、笑みを浮かべ…

「遊子…！」

と、言いながらコンを驚掴みに…

「ギャーーーー！！！！お助けーーーー！！！！」

夏梨は、満面の笑みを浮かべリビングへ

「夏梨ちゃん、お父さん、あれ？まだ、お兄ちゃんまだ帰って来てないよね？」

「遊子！はい、これ！」

夏梨は、驚掴みにしたコンを遊子の前に差し出した。

「キヤー！ボスタフ！」

遊子は、コンをギューと思いつき抱きしめた。

「（グオ！イジゴ！…ハ、ハヤク！カエツギヤー）」

夏梨は、満面の笑みをしながら…

「あー！お腹すいた。」

と、言いながら遊子が装ってくれたカレーをテーブルの上に並べた。

その後で見ていた一心は、ニヤニヤしながら笑いを堪えていた。

「（この際、誰でも良い！だずげでー！）」

コンの心の声が響く事は無かった…

心的（前書き）

遊子と夏梨ばっかし。そろそろ…。

心的

遊子は、夢の中にいた。自分は何処に居るのか？

廻りを見渡せば、水晶のような大きな柱が幾つも連なっている。

目の前には、人らしき人物が…それと…後ろにもう一人？

その目の前の人物らしき人を見れば、自分の母親に似ているくらい暖かくそして優しい雰囲気的人物。すると目の前に、フワリと降り立つ。

聴て…その人物は、手を差し出し。その手を握ろうと…

『……………』

「うう…お母…さん？」

「？遊子…」

夏梨は遊子が普通の夢を見ていたのだと思ったが…もしかしたらと思ひ、

「遊子！もしかして普通の夢を見ていたんだよね…？内容覚えてたりしてる？」

「ううん違う…て言うか…今日は全部覚えてるよ。」

「どんな？」

「うん。えつとね。廻りが水晶で囲まれててね、目の前にね、不思議な人が居てね、それとね…暖かくてそれから…いつもと同じだね。」

「ふうん。わかった。」

「あ！いけない！！朝御飯！！」

「もう、お昼過ぎだよ。」

「あれ？」

遊子は、時計を見て午後3時を過ぎている事に驚き、

「ごめんね、御飯造らなくちゃいけないのに…。」

「大丈夫だよ。私もつい30分位前まで寝てたからさ。あと、遊子
が起きないから親父がもう少し寝かせてあげなさいって要ってたか
ら。」

「…でも、私、夢は見てたけど全然覚えてなかったな…。」

「あ！そうだお兄ちゃん帰ってかた？」

夏梨は、首を横に降った。

「わからない。」

「来たら夢の事相談しようよ。」

「たね。」

二人は、二階から降りた。

「おう。遊子、夏梨起きたか。それと、学校には連絡したから安心しろ。」

「うん。わかった。」

遊子は、父親に兄が帰って来たのかを聞いた。

「お兄ちゃん帰って来た？」

「!!」

一心は、顔には出さないが暫くの間、誤魔化さなければならなかった。

「いや、帰ってきてないぞ！暫く帰って来ないとよ。」

「えー！私と夏梨ちゃんお兄ちゃんに相談したい事があったのに」

「なに！一護に相談だろ！父ちゃんじゃ駄目なのか？」

と、大きなリアクションを取る一心に対し、

「えーだって、お父さんに相談何かしたくないもん。」

一瞬一心は、固まり…真紀特大ポスターに行向かって、

「ああー！母さん！やっぱり思春期なのか娘達が相談もしてくれないよー！」

「当たり前だよ。何で親父に相談しなくちゃいけないんだよ！」

一心は更に泣いた？

困惑（前書き）

次は、一護くんです。

困惑

一護は、薄暗い廊下をひたすら歩いていた。

それは、自分が何処を歩いて居るのか何処に居るか…いや…だが、此処は霊子が濃いから尸魂界に居る事はわかつている。

一護の腕には、霊圧制御装置が嵌められていて、多分壁は、殺気石だろう。

こんな場所に居たら体力だけじゃなく魂魄にまで影響してしまう。

まあ、霊圧制御装置が嵌められている時点で抵抗など出来ようがない。

「畜生！」

壁には、殺気石、自分の腕には霊圧制御装置で押さえられ、魂魄までもがダメージを負ってしまう前に何とか脱出したい。

「でも、俺を此所から出ないため…でも何故？」

奏功する内に一番奥の部屋へとたどり着いて部屋の中に入った…そしてドン！と言う音が響いた。一護は、後ろを振り返り、

「な！」

さっきまで歩いてきた通路が無くなり、其処に在るのは壁だけになっていた。

一護は、仕方なく辺りを見渡し必要最低限の物と寝床が用意されて居る事を確認し、壁に寄り掛け窓の外に目を向けた。
ふと見上げれば、小さな窓から見える月の光に照らされた月を見て…

「あいちら今頃どうしてつかない。」

それは、現世に居る自分の妹、遊子と夏梨、親父、そして友人や仲間達の事を考えていた。

ここに捕まる前…

一護は、虚を察知し被害が出る前に倒そうと公園に来ていた。

そこでは、男の子がブランコに座り何処かキョロキョロと周りを何かを探す用に辺りを見渡していた。

見れば子供は霊体で、因果の鎖りが付いていた。

一護は、先程虚が彷徨っていて危ないので、先に男の子を魂葬させようと目の前まで行った。

声を掛けようと男の子の前まで行き、しゃがんだが…男の子は顔を上げたと言…

「捕縛！」

「な！！何だ！これ？！」

一護の足元から大きな陣の用な物が実現し体が動かなくなってしまう。

そして、男の子は一護の額に人差し指をあて…。

「お眠り下さい。黒崎一護…」

…そこで完全に意識を失ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6895x/>

光と闇

2011年10月21日05時10分発行